

消防職員のストレスに関する臨床心理学的研究

－C I S (Critical Incident Stress) に視点を当てて－

心理臨床学専攻 有 留 香 織

I. 問題

強度のストレスを体験すると心に傷を遺す。リタラ (2002) は、最も明確なストレス源は、「外傷的出来事」であるという。これは、地震・洪水のような自然災害、戦争・原子力事故のような人口災害、自動車事故や飛行機事故のような悲惨な事故、rapeや殺人未遂のような身体的暴行などをいう。救援者は、任務上、この「外傷的出来事」となる現場での救助活動を行わなければならない。本研究では、惨事の中で任務を遂行せざるを得ない救援者のストレスに着目した。特にその中でも消防職員は、任務遂行上、火災や事故など凄惨な場面に直接、遭遇しなければならない。その為、惨事場面や死に直面することが多いと思われる。

また、餅原ら (2006) の研究によっても消防職員が他の救援者 (警察官、海上保安官、救急救命士) に比べ、より凄惨な状況を体験し、強度のストレスを被っていることが明らかになっている。

「惨事ストレス (C I S : Critical Incident Stress)」は近年、注目されてきた言葉であり、定義が未だ確立されていない。本研究では、「C I S」を心理的ストレス反応と定義する。

C I S には、凄惨な状況に加え、Personality (自尊心) や役割 (責任感) による影響も関与するのではないかとと思われる。

先行研究では、惨事の状況とPTSDとの関連は明らかになっているが、C I S を心理的ストレス反応として定義しているものは少なく、惨事の状況とC I S との関連について視点を当てているものは少ない。また、勤務年数や職階等のような基本的な職務上の属性や状況とC I S との関連についても、明確な結果は得られておらず、問題点として残されている。

II. 仮説・目的

1. 仮説

- (1) 救援活動時が凄惨な状況になるほど、C I S のリスクが高くなる。
- (2) 年齢が高く、勤務年数が長いほど、C I S のリスクが高くなる。
- (3) 中級幹部の職員は消防隊に比べ、C I S のリスクが高くなる。

2. 目的

惨事の中でストレスを抱えながらも任務に遂行せざるを得ない消防職員の階級、勤務年数、年齢、惨事体験等を分析し、救援活動時 (直後) に及ぼす影響について明らかにし、予防とケアのありようについて臨床心理学の視点から考察することを目的とする。

III. 方法

1. 対象

A 県中級幹部の職員 74 名及び A 市 (県庁所在地) 消防隊 282 名、計 356 名を対象とした。

2. 調査時期と実施方法

2003 年 6 月、C I S に関する研修会開催前に、参加者全員にアンケート用紙を配付し、その場で回収した。

3. アンケート項目

本研究では、無記名によるアンケート調査を採用した。アンケートは、「年齢」、「婚姻状態」、「勤務年数」、「惨事の状況」、「救援活動時 (直後) の反応 (C I S)」、「救援活動後の反応 (外傷後ストレス障害 [PTSD : Posttraumatic Stress Disorder])」に関するものである。「惨事の状況」及び「C I S」では、11 項目 (加藤, 2001)、「PTSD」では、DSM-IV (1994) の PTSD の診断基準に準拠した (久留, 2004) 17 項目

等について挙げられている。

IV. 結果・考察

1. 対象者の年齢、勤務年数

有効回答数は139名で、全て男性であり、平均年齢は41.4歳（範囲：21歳～59歳）であった。中級幹部の職員は27名、平均年齢47.6歳（範囲：29歳～55歳）、消防隊は112名、平均年齢39.9歳（範囲：21歳～59歳）であった。勤務年数の平均は16.8年（範囲：0年～40年）だった。中級幹部の職員は平均24.8年（範囲：11年～31年）、消防隊は平均17.1年（範囲：0年～40年）だった。

2. 仮説(1)

「惨事の状況」と「C I S」を点数化し、順位相関係数を算出したところ、相関が認められた（ $N=139$, $\gamma=.427$ ）。よって、救援活動時が凄惨な状況になるほど、C I Sのリスクが高くなることが明らかになった。消防職員は、救援活動後だけでなく、救援活動時（直後）にもストレスを感じていることが明らかになった。

3. 仮説(2)

「年齢」、「勤務年数」、「C I S」を点数化し、順位相関係数を算出した。年齢及び勤務年数とC I Sとの相関はみられなかった。よって、「年齢が高く、勤務年数が高いほどC I Sのリスクは高くなる」という仮説は検証されなかった。これまでの研究では勤務年数による違いがみられていることから今後、さらに詳細に分析しつつ、検証することが課題となった。

4. 仮説(3)

「階級」と「C I S」において、 χ^2 検定を行ったところ、中級幹部の職員と消防隊において、5%水準で有意差がみられた（ $\chi^2(1)=4.389$, $p<.05$ ）。中級幹部の職員は、C I Sのリスクが高くなり、消防隊は、中級幹部の職員よりもC I Sのリスクが低くなっていたことが示唆された。しかし、今回の結果では、その時の階級について尋ねていないため、中級幹部の職員と特定することはできないと思われる。だが、惨事が何年前のことかについては尋ねており、中級幹部の職員のそ

の時の年齢や勤務年数は、推定して平均年齢36.2歳で、勤務年数は約13.4年であり、階級は、消防副士長以上であると思われる。

よって、階級が上になれば、責任感が伴い、ストレス反応が表出しやすくなったのではないかとと思われる。

5. 予防とケアのありよう

今回の結果から惨事状況が凄惨であるほど、また、役割責任があるほどストレスを感じやすいことが明らかになった。C I Sを和らげるものとして、ディブリーフィングが考えられる。消防職員も「隊員との活動後の会話」を重視しており、また、「何でも話せる職場」を望んでいることがわかった。ストレスを溜めず、同じ気持ちを共感できる隊員同士で吐露し合うことでストレスを緩和することができると思われる。

また、先行研究からもC I SはPTSDに繋がるというだけでなく、うつ状態を伴うことがあると思われる。このようなことも踏まえ、ストレスを緩和するような組織体制に加え、今後、専門的なカウンセリングが必要になるとと思われる。

<引用文献>

- ・ Rita, Richard, Edward, Daryl, Susan (内田成 (監訳) 2002 ヒルガードの心理学 プレーン出版, 902)
- ・ 厚生労働省 2000 心的トラウマの理解とケア じほう105
- ・ 久留一郎 2004 PTSD 駿河台出版社, 82
- ・ 餅原尚子 2006 救援者の災害ストレス (PTSD, C I S) の予防とケアに関する臨床心理学的研究